

<小学生・中学生・高校生の意見発表>

竹島海岸のそうじ

蒲郡東部小学校 6年 渡 邊 光

光さんは、いつも笑顔で、だれに対しても優しく接することができます。6年生だけでなく下級生からも慕われています。後期は学級委員に選ばれました。みんなから信頼されている証ですね。

7月、わたしはお母さんといっしょに、竹島海岸のごみを拾うボランティア活動に参加しました。海岸は想像していたよりも、とてもきたなくて、本当にびっくりしました。落ちていたごみはおかしのふくろや、ペットボトルなど、全部わたしたち人間が捨てたものでした。海岸だけでなく、海の上にもビニールやおかしのふくろがういていました。ごみを人間が捨てることで、人間以外の自然、海に住む生き物まで苦しめているということにわたしは悲しくなりました。

そのとき、わたしも外で遊んで、家に帰るのがめんどくさくて、ガムの包み紙や小さいふくろを捨てたことを思い出しました。「このくらいならいいか」というあまい心が、自然をふくめたみんなを苦しめていたんだということを知り、自分がしたことをとても反省しました。それからは、自分だけでなく、まわりのことも考えて行動することを心がけるようになりました。竹島海岸のそうじは、まわりに対するわたしの意識を変えてくれるできごととなりました。

暑いなかでの竹島海岸のそうじ。はじめは、めんどくさいし、やりたくないなあと思っていました。実際にやってみると、想像以上にたいへんで、もっといやになりました。そ

れでも、お母さんや、お母さんの仕事仲間のひとと力を合わせながら、ごみを拾っては休み、休んでは拾いをくり返し、がんばっていると海岸はどんどんきれいになっていきました。海岸がきれいになっていくと、なんだかわたしの心もきれいになっていく気がして、だんだんとうれしくなってきました。2時間ほどのそうじが終わると、「ごみを捨てないでください」「ごみは持ち帰ってください」などの看板を立てたり、竹島に遊びに来ている人にみんなで呼びかけたりしました。最初はいやいや参加した竹島海岸のそうじでしたが、終わるころには、こういうボランティアをもっと増やせばいいのに、みんながこういう体験をすれば、わたしのようにごみを捨てなくなるのにつながるようになりました。



数日後、竹島海岸に行きました。どきどきしながらわたしたちがそうじをした場所を見てみると、きれいな海岸のままでした。そうじをしてよかったと、改めて思いました。もし、わたしたちがそうじをしていなければ、きたない海岸のままだったかもしれません。ごみだらけの海岸を見て、過去のわたしのよ

うに、少しぐらいならいいかというあまい気持ちでゴミを捨てる人もいたかもしれません。あのときのわたしたちの努力はむだじゃなかったんだと思うと同時に、またやりたいなあと思いました。今でもときどき、竹島の海岸はきれいなままかなあと気になること

があります。

竹島海岸そうじのボランティア活動は、わたしにとって、とても価値のある体験となりました。これからも、積極的にこのようなボランティア活動に参加していきたいと思います。

点字ブロックの大切さ

蒲郡南部小学校 6年 渡 辺 華 花

華花さんは、明るく、笑顔が素敵です。運動会では応援団の副団長を務めるなど、何事にも進んで挑戦するチャレンジ精神旺盛のがんばり屋です。後期からは、児童会執行部員として、よりよい学校づくりを目指してがんばっています。

みなさんは、点字ブロックを見たことがありますか？

私たちがいつも何気なく見ている点字ブロック。この点字ブロックが大切なものだというのを、私は改めて知りました。

私のお母さんは、視野がとてもせまく、人ごみやなれない道を歩くのが苦手です。今までお母さんは家にいることが多く、お父さんや私、弟がお母さんを引っ張って歩くことが多かったです。しかし最近、お母さんは新しい仕事を始めました。新しい仕事場は名古屋の方で電車を使って毎日通勤しています。今までは私たちがお母さんを引っ張って歩いていけたけれど、私たちの代わりにお母さんを案内するのが点字ブロックになりました。

通い始めたころ、お母さんは、「なれない道だし、暗くなるとさらに見えにくくなるから怖い。」と言っていました。

ある日、お母さんが、「はならん、点字ブロックに慣れるために、練習で一緒に郵便局まで来てくれん？」

と言ってきました。私はゲームなどやりたくて、「えーっ」と思ったけれど、お母さんのお願いだったので、一緒に行くことにしました。

お母さんは杖みたいな物を出しました。杖は見たことがあったけれど、どういうものか知らなかったので、お母さんに聞いてみました。

「ママ、その杖って何？」

「ママを案内してくれる大切な杖だよ。」

とお母さんは教えてくれました。

そんなお母さんを案内してくれる杖を、我が家では、『魔法の杖』と今では呼んでいます。

お母さんの練習についていくと、お母さんは点字ブロックをたどって歩いていきました。点

字ブロックをたどり、目的地の郵便局へようやくたどりつくことができました。私が郵便局まで歩いていくときには簡単に行くことができるけど、お母さんが歩いている様子を



見ていると、杖を使いながら物がなにか、人がいないかなどを確認しながら歩くので、とても大変そうでした。

家に帰ってきて、私はお母さんが見ている世界ってどんな感じなのだろうと思いました。お母さんは視野がせまいので望遠鏡からのぞいたみたいに正面しか見えないそうです。私もためしてみると、左右や足元が全然見えなくて、とても不安になりました。人ごみや暗いところは、もっと大変なのだろうと思いました。だから点字ブロックの大切さが

よくわかりました。しかし、点字ブロックなど工夫されている場所はほんのひとにぎりです。町が栄えているところや駅ぐらいしかありません。

お母さんの大変さを知り、私は困っている人を見かけたら、すすんで助けていきたいと思いました。そして、お母さんや他の障害のある人たちみんなが安心して笑顔で暮らせる町にしていきたいと思います。

言葉が通じなくても

西浦中学校 3年 山 口 香 奈

友達を大切にし、笑顔が素敵な香奈さんは、生徒会副会長として、楽しい行事を計画し、生徒たちをまとめ、全校を大いに盛り上げることができました。吹奏楽部では、仲間とともに金賞を目指してがんばりました。

私は、去年の夏、蒲郡市ジュニア吹奏楽団の国際交流音楽祭に参加しました。

本番前日の合同練習の時のことです。私の隣に座ったのは、韓国の女子高生でした。私は、韓国語がさっぱりわかりません。とにかく何か話しかけようと、知っている英語で自己紹介をしました。すると、その女の子は、微笑んで同じように英語で自己紹介してくれました。今までの緊張がとけて、壁がなくなったように思いました。名前が聞き取れなくて聞き返した時も、嫌な顔一つせず教えてくれてとてもうれしかったです。その子の名前は、スーヒョンといって練習の最後には、「ありがとう。」

と、日本語でお礼を言ってくれました。

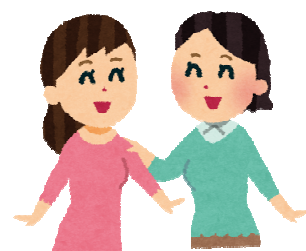
本番当日、それぞれの国の演奏が終わり、ついに合同演奏の時間になりました。楽しかった演奏時間はあっという間に過ぎていっ

てしまいました。この演奏を、音楽を通じて国境を越え、やり遂げることができ、とても大きな達成感を味わうことができました。そして、改めて音楽のすごさを実感することができました。

次の日、最後の演奏になりました。スーヒョンに演奏する位置を伝える時、前日は少し緊張し

ていたけど、その時は、とてもリラックスして伝えることができました。最後に別れる時は、とても寂しかったけれど、一緒に演奏することができたこの三日間は、本当に大切な思い出になりました。そして、私はこの三日間でたくさんのことを学ぶことができました。

まずは、音楽の偉大さです。音符は、世界



共通なので、いろいろな国の人と音楽を楽しむことができます。また、楽しむだけでなく、たくさんの人にその音楽を聞いてもらうことができます。音楽は、外国の人と交流する時の第一歩として、とてもよいと思います。

そして、言葉よりも相手を思いやる気持ちが一番大切なことを学びました。私は、この三日間、話す時には、片言の英語だったり、ジェスチャーで伝えて会話したりしていました。しかし、お互いに理解しようと努力していたので、笑顔で会話することができました。また、スーヒョンとは、一年経った今でも連絡を取り合っています。私は、韓国語で

文章を送り、スーヒョンは、日本語で返してくれます。お互いに翻訳アプリを使っているので、多少文章がおかしくなっていることもありますが、ずっとスーヒョンが日本語で返してきてくれていることがとてもうれしいです。私も以前までは、全ての国の言葉が共通だったら会話もスムーズに進むのにと考えていました。しかし、言葉が違えば相手に伝えようと努力し、相手は、理解しようとするので、どんどん絆を深めていくことができるのではないのでしょうか。私は、この三日間で学んだことを生かして、これから生活していきたいです。

脱！サイレントマジョリティ

塩津中学校 3年 鳥居七帆

七帆さんは、学年の代表として、学年集会の企画・運営に大きく関わっています。司会も上手で、いろいろな場面で考えて行動できる塩中の信頼されるリーダーです。体育大会では、応援団の副団長として、演技内容を考えたり、後輩に教えたりするなど、仲間を大切にする熱い心をもっています。

「〇〇反対！」「△△はやめろ！」

テレビのニュースから聞こえてくる、否定的な意見。あなたはメディアからの情報を鵜呑みにしていませんか？

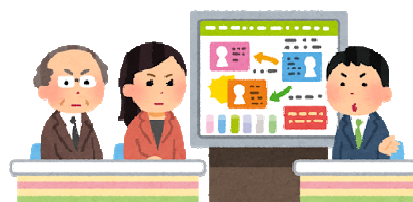
テレビや新聞などのメディアは見ていて面白いもの・過激なものを取り上げます。例えば 10 万人が参加したデモがあったとします。「10 万人も？」と思う人がいると思います。私も昔はそう思っていました。しかし、そのニュースを見た父の一言で、それは違うのでは、と思い始めました。

「たかが 10 万人じゃないか。」

日本人 1 億 2500 万人のうちの 10 万人だろう、とも。そして私に、「サイレント・マジ

ョリティ」（物言わぬ多数派）という言葉も教えてくれました。

この日から、私のニュースの見方が変わりました。気



になるニュースがあると、まず、「テレビで伝えられていることは、本当だろうか？」と疑問を持ちます。そしてその出来事について、父や母に聞いてみたり、自分で調べてみたりします。その出来事がそもそもどんなものなのか、私たちの生活にもたらす影響など。知れば知るほど面白いと感じます。その後は、

自分なりにその出来事について考え、そして、まわりの人にも意見を聞いてみます。人の意見を聞くことで、自分の意見が 180 度変わることもあります。しかしそれも、自分で考えた自分の意見になるといってよいのではないのでしょうか。

以前、私は友達にも気になったニュースについて「どう思う？」と聞いたことがあります。

「興味ないし」

「ニュース見ないし」

なんだか少し不安になりました。選挙権が 18 歳に引き下げられますが、海外と比べると日本の学生は政治に関心がうすいそうです。メディアの言葉を鵜呑みにして、自分なりにそのニュースのことを考えないまま、選挙に臨んでしまう人が出て来るのではないのでしょうか。それでは自分の意見とは言えないと

思います。自分で考えるから「意見」となるのです。

何か物事や出来事を受けて、それについて考えることはできているし、その考えを人に示すこともできるのに、話題が政治や経済にすりかわっただけで「そんな難しいこと………」と、考えるのをあきらめてしまっ
てはいないですか？「わからないから」とニュースについて考えるのをやめないで下さい。わからないなら、知ろうとするアクションを起こしましょう。自分の意見がマジョリティ（多数派）、マイノリティ（少数派）、どちらになるかはわかりませんが、だんまりでも、わめき立てるでもなく、言わなければならないときにしっかりと言う。そのために自分の目や、耳で確かな情報を得る努力をする。これこそ私たちが目指すべき「大人の姿」ではないのでしょうか。

町づくりと町おこし

三谷中学校 3 年 竹 内 陶 真

何事にも実直に前向きに取り組むことのできる陶真君は、水泳部のエースとして、学級のリーダーとしてこれまで活躍してきました。休みの日には好きなアニメや小説に、時間を忘れて没頭するなど少年らしい一面もあります。

「町おこし」という言葉を最近テレビや新聞でよく目にします。それに関連してふるさと納税や地域の PR 動画が話題となっています。一方で「町づくり」という言葉もあります。僕たちがいつも唱和する市民憲章にも「みんなの力で町づくり」とあります。「町おこし」と「町づくり」はどんな違いがあるのでしょうか。

このことについて、僕は自分の住んでいる、蒲郡市のことで考えてみました。きっかけは学校で行っている総合選択の授業でした。僕

の通う三谷中学校では、2 年生の総合的な学習の時間で、「地域」をテーマに、興味がある講座を選択し、学習をしています。僕はその中で「三谷祭り」について学ぶ講座を選びました。そこで三谷祭り保存委員会の方に話を伺ったところ、「歴史ある祭りを続けていくことが難しくなっている。その一つに参加人数が少なくなっていることがある。」と今の問題点を教えてもらいました。そこで保存会としては、三谷祭りの良さを様々なメディアを通して宣伝し、他の地域の

人との交流を深める工夫をしているとのことでした。祭りは、昔からの伝統を受け継いで同じことを行っているように思っていたのですが、時代の流れとともに変化し、より人と人とのつながりを求めていることに気づかされました。

また、僕は「うどんサミット」や「ごりやく市」にもボランティアとして参加しました。どちらも思っていた以上の人出があり、驚きました。なぜそんなに人が集まったのかというと、その裏には宣伝や広告はもちろんのこと、ゆるキャラやイベントを考えて盛り上げるたくさんの人が関わっていることを知りました。僕は、お客を呼び込む仕事をさせてもらいましたが、「〇〇はどうですか」とだ



け呼びかけていたところ、ボランティアのリーダーに「具体的に商品の魅力を入れたほうがわかりやすいよ。」と教えてもらいました。そこで商品の魅力について自分なりに考え、言い方を変えてみるとお客さんが

耳を傾けてくれ、並んでくれるようになりました。

この2つの体験を通して僕が感じたことは、どちらも自分たちの活動に誇りをもち、今までよりよくしようと常に考えて行動しているということです。

そして、このことを「町づくり」と「町おこし」に合わせて考えてみると、「町づくり」とは自分たちの町を愛し、誇りをもつ人を増やすこと。「町おこし」とはその町の誇りを他の地域の人に広めることだと思いました。

三谷祭りでは、祭りの良さを広め、参加する人を広く募ること、ボランティア体験では自分たちが提供する地域の特産品の魅力について考えることは「町づくり」につながると思います。また、自分たちが大切にする祭りやイベントをさらに魅力的なものにしようとし、他の地域の人にたくさん知ってもらおうと努力することが「町おこし」ではないかと考えました。「町づくり」や「町おこし」は難しいことではありません。一人一人が自分の待ちのことを好きになり、どうしたら今よりも魅力のある町になるかを考え、その良さをたくさんの人に広げていくこと。それが、僕たち一人一人の「町づくり」や「町おこし」なのだと思います。

笑顔のリレー

大塚中学校 3年 堺 舞 柚

舞柚さんは、何事にも一生懸命に取り組み、仲間からの信頼が厚いです。体育大会では応援合戦の団長を務め、80人の集団をまとめ上げました。また、後期生徒会副会長として、笑顔が絶えない学校づくりを目指して日々頑張っています。

みなさん、「笑う門には福来たる」ということわざを知っていますか。「笑いの絶えない家庭には自然と幸せがやってくる」という意味です。そして、私は、笑顔は周りを幸せにする魔法だと思っています。

私が保育園に通っていた頃、先生がピアノをよく弾いてくれました。先生が弾くピアノを聴いたり、合わせて歌ったりする時間を楽しみにしていました。先生が笑顔で弾いているのを見て、私も笑顔になり、友達もにこに

こしてきて、みんな笑顔になっていました。

しかし、中学生になると、笑顔ばかりでは
いられません。私は、怒ったり、疲れていた
りすることの方が多かったと思います。みな
さんもこんなことはありませんか。「テスト
の点数が悪い」「友達とけんかした」こんな
ときは、気持ちがぐちゃぐちゃして、誰かに
あたってしまいそうになったことがあります
か。

「あの子、怒っているから近づかない方がい
いよ」と思われていたことでしょう。自分の
幸せが、逃げて行ってしまっていたことでは
ょう。

中学2年。大塚保育園で職場体験学習をす
る機会を得ました。保育園の門の外に毎朝保
育士さんがいて、笑顔で「おはようございま
す」と私に言ってくれます。その笑顔と挨拶
で「今日一日がんばろう」という気持ちが湧
き上がりました。職場体験学習で大塚保育園
に行って、笑顔が絶えないすてきな職場だな
と思いました。

職場体験の最終日、私は
園児たちの前で「妖怪ウォ
ッチ」のテーマ曲をピアノ
で演奏しました。笑顔を意
識して……。すると、その
曲を知っていた園児たち



が、にこにこうれしそうにして、歌ってくれ

たり、踊ってくれたりしました。周りの人を
笑顔にできる職業につきたいなと改めて思
いました。

中学3年。私が、体育大会の応援合戦の練
習をしていた時のことです。応援団長だっ
た私は、自分がしっかりしなくてはと思えば
思うほど、応援の踊りを覚えられないこと
にもどかしさを感じていました。「もう少し踊
りを簡単にしようか」と私が弱音を吐いてし
まいました。しかし、周りの仲間が誰もいや
な顔せず、丁寧に練習につきあってくれまし
た。たぶんいやな顔をされていたら、私は踊
りの練習を続けることができなかったと思
います。いつも笑顔で応援してくれたのです。
そして、私が踊れるようになったときは、仲
間が私以上に喜んでくれました。

私は笑うことが大好きです。そして、みん
なが笑っている姿も大好きです。私は、たく
さんの人が、世界中の人が、笑顔で包まれる
ような未来をつくっていきたいです。それに
は、まず自分が笑顔でいることが大切です。
そして、自分の周りに笑顔が広がり、その友
達の笑顔がまたたくさんの笑顔につながっ
ていけばいいと思います。私と同じ思いをも
つ人が一人でも多く増えたらいいなと願っ
ています。

差別のない世界へ

形原中学校 3年 大須賀 すみれ

すみれさんは何事にも努力できる生徒で仲間からの信頼が厚いです。吹奏楽部の部長とし
て活躍し、コンクール金賞獲得に大きく貢献しました。また、現在文化祭実行委員長として、
各部局をまとめ、文化祭の成功に向け努力しています。

私は「障害者」という言葉が嫌いです。そ の一言で、障害がある方を差別しているよう

に感じてしまうからです。

私の母の知り合いには、障害のある方がいます。幼い頃からそんな母に、

「障害は個性だよ。偏見をもってはいけないんだよ」

と言われていました。母は自身の体験から

「自分がつらい思いをした人は、他の人の何倍も優しいよ。」

ということも教えてくれました。だから、私は障害に対して悪い印象をもったことがありませんでした。

私の家の近くには、授産所があります。そこで毎年行われる夏祭りに友達に行った時のことです。友達と歩いていると、障害のある方とすれ違いました。その方は顔が少し変形していました。変に意識することなく私が通りすぎようとしたとき、友達が、

「今の人やばくない。障害がある人とか無理だよね。」

と言いました。私は、

「そういうこと言っちゃダメだよ。」

と軽く受け流しましたが、家に帰ってもその言葉が頭の中に残っていました。初めて障害に対する偏見を目の当たりにした瞬間でした。

それから私は、いろいろなことを考えるようになりました。どうして障害があるということに偏見がもたれるのか。どうやったら、すべての人が生きやすい世界になるのか。

その答えはわかりませんが、偏見のない世界にするためには、「認め合う」ことが一番大切なのではないかと思いました。

人は、他人の自分と違うところを認めるこ

とが苦手だと思います。自分ではできるのに相手ができないことがあると、

「なんでできないの。」

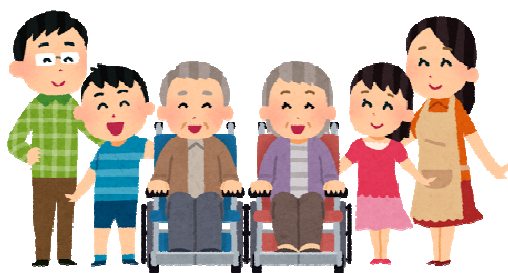
と非難する人が多くいます。障害に置き換えても同じことだと思います。自分と違うところがあると、

「気持ち悪い。」

と遠ざかっていくことが、差別になるのだと思います。もっと認め合うことができれば、どんな人でも安心して生活できるようになると思います。

また、自分と相手の立場を逆にして考えることも必要だと思います。「もし自分に障害があったら」と本気で考えることができれば、そのことを悪く言うことなんてできなくなると思います。考えることが人の気持ちを想うことに繋がり、人を想うことが差別のない平等な世の中をつくることに繋がります。

いろいろな人がいる世の中では、みんなが支え合っていくことは難しいかもしれませんが、でも、もし支えあうことができれば、もっと多くの笑顔が生まれて、幸せになることができます。そんな平和な世の中のために、少しでも多くの人が自分以外のことを考える必要があります。私は、まず自分のそばにいてくれる人の笑顔のためにできることを考え、行動していきたいです。そして、その想いが広がって、差別のない世の中に近づくことを願います。



私にできること

中部中学校 3年 内田 愛弓

愛弓さんは、バレーボール部のエースとして、自分自身の技術向上はもちろん、仲間へのアドバイスも積極的に行い、チーム全体が伸びていけるように努力していました。学級では、副級長として、全体をよく見渡し、広い視野で物事を考え、陰日向なく行動し、クラスをまとめてくれました。

「平成23年3月11日に起きた東日本大震災。そのとききっと私にできることがあったのではないだろうか。」

数年がたった今、14歳の私は考えています。

当時の私は9歳。揺れなどは全く感じませんでした。でも、帰宅すると、そのとき日本に起きていた恐怖を知りました。テレビの画面には大きな波がたくさん、車、建物、人間さえも飲み込み、どんどん迫って来ていました。感情を持たない波に向かって、

「やめて、お願いだからやめて。」

当時の私にはそうやって願うことしかできませんでした。何もできなくてただ画面をじっと見つめているだけでした。そんな中、救助をしたり支援物資を送ったり、ラジオを始めたり、たくさんの大人が動いていました。

「大人だからできるのか。大人になったら私もやるんだ。私は子供だから何もできない。」

当時の私はそう考えていました。

でも、14歳になった今、そうとは思いません。子供でもできることが何かあるはず、そう思うようになりました。

「東日本大震災に限らず、何か人のためにできることはあるだろうか。」

そう考えているときに、父のことが頭に浮かびました。私の父は消防士です。人のために火を消したり、救助したりします。私は自分を犠牲にするのはとても怖いのです。もし私が

助けに行って、私の力不足で助けられなかったら…そう考えると、人のために行動なんてできないと自信がなくなります。

でも、人のためにできることは命を助けることだけではありません。私の姉は今年の夏東北へボランティアに行きました。ボランティアと言っても物資を届けたり、掃除したりすることではありません。被災地へ行っていろんな人と会話し、津波についての話を聞いたそうです。

「物資を届けてくれたり、掃除をしてくれたりしたことはとても嬉しかった。でも、今の願いは被災地に来て話を聞いてほしい。そして、津波の恐怖を伝えてほしい。」



姉が出会った人達はそう言っていたそうです。

「これなら私にもできる」そう思いました。

私は将来、何か人の役に立つことをしていきたいです。みんながいつも笑顔でいられるために、私ができることを、小さなことからでも行動していきたいです。そして、東日本大震災のときに行動していた大人のようになりたいです。

私一人の力は小さなものです。でも、たとえ小さな力でも人を助け、勇気づけ、笑顔にする力を持っていると思います。誰か一人が

行動すればそこからその行動が広がり、すべての人が笑顔でいられる社会ができると思います。その「誰か」は他の誰かではありません。「私」です。小さなことでもいい。今

の私にできることから始めたい。とにかく周りにいる人を笑顔にするために行動すること。それが今の私にできることだと思います。

たった一言が言えなくて

蒲郡中学校 3年 荒島 彩乃

彩乃さんは、人の想いを大切にし、一人一人の思いを聞き、考えを引き出したり、まとめたりする優しさがあります。生徒会長として、よりよい学校にすることを目指してがんばっています。心温かな学校になるように、自ら仲間のよさを見つけ、認め合うことのすばらしさを広げました。

「うちの親、まじでうざい。」

友だちと話していると、よく聞く言葉。私は笑顔で「そうなんだ」と返します。でも、心の中では「なんでそんなことを言うの。それはあなたのことを思って言ったことなのに。お母さんがいなくなった生活を考えたことがあるのかな」と、ぎゅっと締めつけられたような気持ちになります。

2013年。私は母を亡くしました。暑い夏の日「今日は調子がいいから」と言って母は洗濯物を干していました。増えていく「疲れた」の言葉、辛そうな表情。母が体調を悪くしていったのはそのときからでした。

あのとき、「私も手伝うよ」と言えていたら。そのときだけではありません。ご飯を作っているとき、掃除をしているとき、お皿を洗っているとき、私は「手伝うよ」の一言がどうしても照れくさくって言えませんでした。

「あれがほしい。これ買って」私はわがままでした。たくさんのわがまを言って、母を困らせてしまっていました。そんなこと、我慢していれば母はもっと元気でいられたかもしれません。

「部屋を片付けなさい。」「こんなことしたら

駄目でしょ。」母に叱られ拗ねる私。母からの言葉に対して適当な言葉を返す私。酷いときには母を無視した私。素直になっていれば。もっとたくさん話していれば。今、数え切れないほどの後悔があります。

そんなたくさんの後悔の中でも、いちばん後悔していることがあります。それは「ありがとう」が言えなかったことです。

母との大切な思い出。母が亡くなる前に、私とは母ディズニーランドへ二人で旅行に行きました。「あーちゃん、どこへ行きたい」と聞いてきた母に、私は「旅行に行けるんだ」「いつもは家族揃ってだけど、お母さんと二人で旅行なんて珍しいな」なんて考えていました。いつもは姉兄妹三人で母を取り合う私たち。母と二人きりでいける、しかも泊まりで行くディズニー旅行に私は胸を弾ませていました。

いつもは母がカメラマンで取っていた私たち家族の写真。でもこの旅行では、キャストさんや周りのお客さんに頼んで母と二人の写真がたくさん撮りました。私が大好きな乗り物にも繰り返しいっしょに乗って。私にとって夢のような2日間でした。

今思うと、自分が生きられるのはもう長くないと覚悟した母が、私たち姉兄妹一人一人



との時間を作って、思い出を残してくれたのだと思います。でもあのとき、私はただ楽しんでばかりで、心からの「ありがとう」が言えませんでした。

母を亡くしてから4年が経ち、父の携帯を借りていじっていた私は、ふと気になって、父と母のメールのやりとりを見てしまいました。そこには「同じ病室の人のいびきがうるさくって耳栓が欲しいよ」とか「ご飯がうなぎだった。珍しい。」など写真付きの病院生活の様子から、「検査の結果が良かったから早く退院できそう」「今日は体調が悪い」といった病気と闘っている母の姿がありました。

しかし、そんな母の闘病の様子以上に「あーちゃんの夏休みの宿題は大丈夫そう」など、会話のほとんどが私や兄、姉についての話題に溢れていました。

※ 11月12日に実施された少年の主張全国大会に出場し、審査委員会審査委員長賞を受賞しました。

「一」の持つ力

蒲郡東高等学校 2年 立石芽生

立石さんは、朗らかで優しい性格で、いつも周りを笑顔にしてくれます。親しみやすさと正義感の強さを持ち合わせており、クラスメイトや弓道部の仲間からも頼りにされる存在です。

今からみなさんに質問をします。想像してください。もし、この場で誰かが倒れたとしたら、あなたは何番目に助けに行きますか。1番に駆けつけると断言できるでしょうか。私自身は、5番目くらいに動き始めるのではないかと思います。一番に、最初に、一步を

母を亡くしてから気付きます。病気で辛いのに、自分より私のことを考え、私のためにたくさんのことをしてくれていたこと。私に深い愛情を注いでくれていたこと。そんなことも分からず「ありがとう」のたった五文字も言えませんでした。

「うちの親、まじでうざい」

私も、家族に対して内心「うるさいな」「放っておいてよ」と思うことがあります。でもそんなとき、心のどこかで気持ちにブレーキをかけます。うざいと感じた相手の言葉の裏には、自分に見えていない相手の思いがあるかもしれません。だから私は、そのときの感情だけに流されず、言葉や行動の後ろ側にある思いや考えを感じ取り、受け止められるようにしたいのです。

今ある日常は決して「あたりまえ」ではありません。だんだんと変わり、いつかはきつとなくなっていくます。ありふれた日常の中にある、身近な人の思いに対して丁寧に向き合い、感謝の気持ちを伝えていきたいです。

踏み出すには、勇気と意思が必要です。私は、そんなに強い人間ではありません。人の目やその後のことを気にしてしまいます。でも、少しずつですが、私はその強い人間になろうと思っています。

今まで、あと一步を踏み出していけば、と

思う出来事に何度か出会いました。その中の一つに、電車内のことがあります。座っている私の斜め前に、ご年配の女性が立っていました。席を譲ろうかと思いましたが、もし「そんなことしてくれなくてもいい、そんな年に見えるのか」と怒られてしまったらと考えると、行動できませんでした。その後、別の女性が彼女に席を譲っていました。結果として私は、見て見ぬふりをしてしまったのです。

「見て見ぬふり」。自分は傍観者となり、決して当事者にはならない。自分の目で見ているにも関わらず行動しないため、結局何も変えられない。いじめや虐待といった様々な社会問題も、この見て見ぬふりが大きく関係していると思います。私がやらなければという意志や責任感よりも、自分が動くことで何かマイナスのことが起きてしまったらという不安や、誰かが何と

かしてくれるだろうという他人任せの気持ちが大きくなってしまいうのです。だから、何もしない。何もしない方が楽ですし、自分は傷つきません。でもこれでは、自分を守るために人を犠牲にしているのと同じです。もしこの場で誰かが倒れても、5 番目に助けに行く私は、誰かが



最初に手を差し出すまで見て見ぬふりをしているのと同じだったのです。だからこれからは、1 番に一步を踏み出す勇気を持ちたいと思います。

たった一人が行動しても大した意味はないと感じることもあるかもしれません。世界的な観光地である京都市では、街中でのゴミの置き去りが問題となっています。廃棄禁止の場所になぜ捨てるのかとのインタビューでは、「すでにゴミが置いてあったから自分も捨ててよいと思った」と回答する人ばかりでした。確かに、一人の人間ができることは限られています。では、自分一人だけが小さなゴミを捨てても大したことはないのでしょうか。一人、また一人と積み重ねていくことで、ゴミの山ができる。自分だけならよいだろうという考えが、こうして大きな問題へと発展していきます。

見て見ぬふりをするのも、自分だけなら大して関係がないと考えるのも、「一」という数字の持つ力を正しく認識していないことが原因です。一人の力は、その個人が考えているよりもずっと大きいのです。ここで私一人が主張しても変わらないということは、絶対にないと思います。小さな一步を踏み出す勇気を一人ひとりが持てば、世界は変わると確信しています。

ボランティアを身近にするには

蒲郡高等学校 3 年 加 藤 珠 羅

珠羅さんは、ボランティア部部長として様々な活動で部をまとめました。昨年は「高校生手話コンクール」で全国 3 位に入賞し、今年の「明るい社会づくり実践体験文」では県知事賞を受賞するなど活躍しています。

ボランティアと聞いて何を想像しますか？小学校や中学校の経験からは、ゴミ拾い

やトイレ掃除が想像されました。しかし、高校に入学してからボランティア部に所属し、

そのイメージはがらりと変わりました。ボランティアは楽しいものだと思うようになりました。

私の所属しているボランティア部では、掃除などはあまり行いません。ではどのような活動をしているかというと、例えば「蒲郡子ども体験活動」という行事に参加し、小学生とキャンプに行きます。そこでは小学生を指導する立場になり、周囲をよく見て行動することが求められます。また、炊飯のときには小学生と協力して火をおこしたり材料を切ったりします。そこでは達成感を得られるだけでなく、人間関係を築くことができます。そのほかにもキャンプファイヤーをしたりテントで泊まったりすることで仲間と楽しく過ごす時間もあるので、大変なことばかり



ではありません。

また、キャンプを運営している青年ボランティアの方々と関わることで、自分たちだけでは

気がつかないことを教えてもらえたり、今後につながる話を聞くことができたりと、とても勉強になります。

キャンプの活動だけでなく、着ぐるみを着て街頭で活動したり、お祭りの手伝いをしたりします。このような活動を通して社会と関わることで、社会貢献をやりがいのあるもの

に感じることができます。

ではなぜボランティアは身近にならないのでしょうか。私はつまらないと思ったり、休みたいと思ったりする人が多いのだと考えています。つまらないと考えているのは、学校などで行われたものやイメージから定着してしまったものだと思います。しかし、ボランティアとは奉仕活動なので自分がやりたいと思ったものを選ぶべきだと考えています。そうすることでつまらないと感じる人や積極的になれない人を減らしていけると思います。

また、最近ではボランティア活動への参加者の平均年齢が高齢化しています。若い人がボランティア活動をしているのをあまり見かけないため、参加しづらいと考える人もいます。それを改善するためには、参加経験のある人が友人や近所の方を誘って広めていければいいと思います。

ボランティアをすることで地域の人や社会と関わることができ、自分も成長できます。それはとても幸せなことです。これから社会に出る人も社会で働いている人も、協力し合うことでよりよい社会にできたら素晴らしいと思います。私は自分の経験を活かし、少しでも多くの人にボランティアのよさを伝えていきたいです。

壁

三谷水産高等学校 3年 蔵 満 恵美里

蔵満さんは、明るい性格でたくさんの友人がいます。部活動は増殖部に所属し、錦鯉や金魚などの飼育を担当しています。課題研究では調理班で料理の腕を磨いています。

私は、外国の人がどのようにすれば日本で生活しやすくなるのかと疑問に感じた。

なぜなら、私が中学生のときに通っていた学校には、他校と比較すると、親が外国人の

方が多く、同級生には外国の友人も多くいた。その友人の中には、日本語をあまり理解していない友人もいた。国語や社会などの授業のときは私たちとは別に、日本語教室へ行き授業を受けていた。

学業の面から考えると、言葉を覚えることはできたとしても、日本語の意味や使い方といったところまでは、中々理解するまでには時間がかかるはずだ。

また、生活の面においては、日本人とは言語や文化等の違いもあり、積極的にコミュニケーションを取らずに、距離を置いてしまう人が多いと思う。

実際に、私は英語が苦手なため、もし外国の人に道を聞かれたらどうしよう、何て答えたら良いのだろうと困る可能性があるからと思い、自然と目をそらしたり、距離を置いてしまっていることがある。

例えば、日本語には敬語、丁寧語、同音異義語、カタカナといった特徴的なものがあるが、私たち日本人でも悩むように、外国の人も同様に言語を理解するだけでも、とても大変である。学業の面と生活の面を見ても言葉や文化の壁があると感じた。言葉や文化の壁を完全に無くすのは、無理かもしれない。だが、そのために努力することはいくらでもできる。

実際に、中学校のクラスメイトに日本語をほぼ話せない友人がいた。最初は、何て話しかければ良いのかすら分からなかった。しかし、私は不安よりも仲良くなりたいという気持ちの方が強く、勇気を振り絞って話しかけ

た。すると、友人は笑顔で頭を軽く下げてくれた。私はとても嬉しくて自然と笑顔になった。だが、友人には日本語が通じない。私は自分の気持ちを言葉で表すことができないことに苛立ちを感じるとともに、少し悲しかった。しかし、私は言葉が通じないから諦めるのではなく、表情や

ジェスチャー、絵を描くことで自分の気持ちを伝えることにした。すると、自分の想



像以上に会話をすることができた。会話をしていくうちに勉強を教えることもできるようになり、お互いの国の文化も分かるようになった。私も友人も、相手が伝えようとしてくれていることを一生懸命理解し、互いに伝えたいことを何かに表すことで、コミュニケーションも取れ、言葉や文化の壁を乗り越えることができた。お互いを認め合うことで、思いやりも生まれ、積極的にコミュニケーションを取ることで、次第に打ち解け、言葉や文化の壁は大いに減るだろう。その壁が無くなることによって、外国の人がより日本で生活しやすくなると思う。

たとえ、生まれた国が違って、言語や文化が違って、言葉が通じなかったとしても、お互いに認め打ち解け合い、思いやる心を持ち尊重し合い、積極的にコミュニケーションを取ることができれば、外国の人だけでなく、きっと誰もが生活しやすくなるだろう。